

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 前期教養学部文科Ⅱ類2年

参加プログラム: University of Sheffield Summer Program 2013 派遣先大学: The University of Sheffield

卒業・修了後の就職(希望)先: 5.民間企業(業界:コンサルタント)

派遣先大学の概要

シェフィールド大学は、街のいたるところにキャンパスが点在していて、まさに町と大学が一体化しているようであった。各建物は新しいものが多くきれいで、広々としていた。シェフィールドの豊かな自然とあいまって、のびのびとした学習環境がととのっており、ノーベル賞受賞者を複数人輩出していることもうなずけた。

参加した動機

このプログラムには、将来の長期留学を志すものの、英語力に不安を抱えた者を対象とした、ステップアップとしての短期留学という側面があり、その点が一番の決め手であった。内容については、ただ英語を学ぶだけではなく、シェフィールド大学の優秀な講師陣による、様々なトピックのレクチャーを聞くことができるという部分に魅力を感じた。英語の学習に加え、英語を生かして、レクチャーを理解したり学問的な刺激を受けたりするといった経験もできる方が、自分の将来への貢献という観点で見た場合でも、得るものが多いのではないかと考えた。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

このプログラムに対して予想以上の応募があったため、応募期間途中で、応募締め切りが大幅に早められる、という事態が生じた。申請書の準備や TOEFL 等の受験など、応募に必要な手続きについてはとにかく早めに取りかかることをお勧めする。

参加決定後、このプログラムの選考の倍率は約3倍であったと聞かされた。申請書の動機をしっかりと書くのはもちろんのこと、大学の成績が良いこと、TOEFL 等のスコアを持っていることも大切だと思われる。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

Student Visitor visa を、英国入国時に取得する必要があった。出発前に、国際交流課からのアドバイスをもとに、入学証明書や滞在先証明書、東京大学の在学証明書など、取得に必要とされる様々な書類を用意した。結局、入国時にそれらを見せることはなく、パスポートと入国書類だけで取得することができた。ただし、他の参加者とともに集団で入国審査の列に並んでいたため、一番先頭にいた人は、それらの書類を見せる必要があったのかもしれない。いずれにせよ、国際交流課からアドバイスをもとに事前に書類を用意すれば、特に問題はないと思われる。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

特に準備することはなかった。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

大学生協のホームページから、損保ジャパンの海外旅行保険に加入した。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

まだ前期教養学部所属で、留学期間と試験期間がかぶることもなかったため、特別な手続きは必要なかった。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

出発前にもっていた TOEFL の点数は 84 点だった。他の東大からの参加者と比べると、文法には詳しいものの、リスニング・スピーキング能力において明らかに劣っていたと思われる。出発前の3週間は、BBC ニュースを毎日 5~15 分間くとともに、会話表現に関する参考書を1冊読んで、留学に備えた。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

IC レコーダーがあると、レクチャーを繰り返し聞いて復習ができるので便利だった。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

午前中は英語を学び、午後はレクチャーを聞いたり、そのレクチャーの復習、次のレクチャーの予習をしたりするのが基本のスタイルであった。午前中の英語の授業は、特に教科書使わず、クラスメイトとのディベートやディスカッションなど、日によってやることが変わる授業と、配布された教科書に沿って、リスニング問題やディスカッションに取り組む授業の2コマ(各 90 分)に分かれていた。どちらの授業も、重要な単語や表現の解説が丁寧に行われた。クラスによっては、予習課題が出されたようではあるが、自分のクラスで出されることはなかった。午後のレクチャーは、1時間の教授の講義と、30分間の質疑応答がセットになっていた。レクチャーの復習は、レクチャーに基づいて用意された様々なトピックをもとに、シェフィールド大学の学生1人と東大生5、6人がグループになってディスカッションをすると

というのが主な内容だった。レクチャーの予習では、ELTC(English Language Teaching Centre。午前中に私たちが英語を学ぶ場所)の講師一人が全てのレクチャー分を担当し、各レクチャーのトピックに関する重要な単語・背景知識の解説が行われた。こちらも、特に予習・復習課題が出されることはほとんどなく、授業内で完結するものだった。

②学習・研究面でのアドバイス

午前中の各クラス半分くらいは東大生や他の日本人学生で占められ、午後はシェフィールドの学生数名を除いて、東大生のみでの受講となる。また、同じ宿舎に東大生しかおらず、朝食や夕食等で他の学生と交流する機会がほとんどなかった。できるだけ英語に浸かりたいのであれば、自分から積極的に午前中クラスメイトに話しかけたり、他の参加者と日本語で交流することを避けたりする等の工夫が必要である。

③語学面での苦労・アドバイス等

クラスによって状況は違うようだが、私の場合、クラスメイトの英語力がとても高く、話すスピードが私にとってとても速かった。また、出身国もバラバラで、特にナイジェリア出身の人は独特のなまりをもっていた。そのため、クラスメイトの英語を聞き取ることが難しく、ディスカッションで噛み合わないことも多かった。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

The Edge というシェフィールド大学の宿泊施設を利用した。広々とした個室で、快適だった。ただし、ランドリーの料金が1回 3.75 ポンドと割高であった。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

運よく気候に恵まれ、晴れている日が多く、雨はほとんど降らなかった。日中は、半そで1枚で過ごせるくらいの気温で、過ごしやすかった。

寮の近くにはスーパーがあり、町の中心部に行くショッピング施設が多くなる。寮から英語学習やレクチャーで使う施設までは、徒歩で 30 分ほどかかるが、バスを利用することもできる。バスやトラム、鉄道が充実していて、鉄道を利用すれば、1時間ほどでマンチェスターに行くこともできる。

寮の食事は、朝はメニューが豊富なパイキング形式、夜は2つのメニューから選択する形式で、基本的においしかった。街の飲食店は、サンドイッチを販売するところが多かった。

支払いは、クレジットカードと現金を使い分けた。バスでは現金しか使えないし、逆に寮のランドリーはカードしか使えないということがあった。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

シェフィールドはイギリスでも治安が良い方であると感じられた。もちろん、日本にいたときとまったく同じような感覚で過ごすのは危険だとは思いますが、治安面で気になった点は特にない。ただし、週末にロンドンなど都心部に行く場合は、シェフィールドにいたときよりも、スリ等を警戒する必要がある。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

団体航空券が約 23 万円、授業料と寮の宿泊費・朝夕の食費がセットで 970 ポンドかかった。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

受給していない。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

ほぼ毎日、放課後にシェフィールドの学生による何らかの催しがあった。ダンスやフットボールトーナメント、ティーパーティーなど、日によって様々なものが開催され、授業後に自由に参加することができた。また、週末に1日開いている日があったので、電車で片道約3時間かけて湖水地方に行き、自然を楽しんだ。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

2週間というとても短い期間だったこともあり、特に利用することはなかったが、学生へのサポートをしてくれるスタッフの連絡先の一覧が初日に配布されるなど、充実しているようであった。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

24 時間開いているという一番大きな図書館は、天井が高く広々としていて、1 人当たりの自習スペースにもゆとりがあり、とても好感がもてた。また、図書館には自由に使える PC が完備されていた。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

私は、このプログラムに参加するにあたり2つの目標を設定していた。1つは、英語学習の中で、自ら積極的に発言することにより、自身の総合的な英語力、特にスピーキング能力を高めることである。もう1つは、レクチャーや他の留学生との交流を通して、自身が将来学部留学をすることを考えた場合にどのような能力を身に付けなければならないのかを知ることであった。どちらの目標も、将来の長期留学を見据えたものであった。

結果的に、スピーキング能力を高めることはできたと考えている。それは、必ずしも的確な表現を使って正しい発音

で話せるようになったということだけを意味するものではない。大学の先生や、クラスメイト、町の人々との会話を英語で行わなければならない状況で、積極的に発言をしたことで、「このように話せばだいたい伝わる」といった感覚を得ることができた。英語を話すことに対する抵抗感を軽減することに成功できたのは、1つの収穫である。

また、自分の弱点が明確にわかったというのも収穫の1つである。留学に行く前は、TOEFLの結果から、スピーキングの向上を一番の目的に据えていた。しかし、留学中、クラスメイトの発言や教授のレクチャーを聞き取ることができず、その後のディスカッションで自分が何を言ってよいかわからなくなってしまうことが多々あった。長期留学のことを考えても、まずはリスニング能力を絶対的に高めなくてはならないという新たな目標を定めることができた。

しかし、後悔もいくつかある。一番の後悔は、他の東大生の参加者と過ごす時間が多く、他の留学生と交流する時間が少なかったことだ。午前中のクラスや午後のレクチャー、宿泊施設で東大生が固められてしまっていたというプログラムの問題もあるにはあるが、自分自身に英語だけしか話してはいけないというルールを課したり、午前中のクラスの留学生たちと授業外でもっと会話したりすることができたはずである。もっとも、後者については、相手が何を言っているかを理解できなくては会話がうまくいかないの、上記にも書いたとおり、リスニング能力の向上が当面の課題になると思われる。

いずれにせよ、2週間という期間はごく短く、英語の実力が劇的に伸びるわけではないことはわかっていた。ただ、帰国してみて、英語の学習に対するモチベーションが確実にあがっていることを実感している。これこそ、このプログラムに参加したことによる自分の確かな成長であり、自分にとってのプログラムの意義であると考えている。

②参加後の予定

長期留学を見据え、リスニング力の向上、より具体的には、いろんな国の人話す英語が聞けるようになることを目標に、毎日様々な音源に触れたいと思う。また、スピーキングに対する抵抗が減ったので、英語を使った交流会やイベントに積極的に参加していこうと考えている。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

やはり、将来の長期留学を考えている人にとっては行く価値があると思われる。午後のレクチャーを含め、いわゆる大学生活を送ることができるからだ。ただし、純粋に語学力の向上だけを目標にしているのであれば、語学に特化した短期留学の方がよっぽど効果があるかもしれない。また、自由時間が多いので、遊びほうけることも、図書館を活用して勉強することもできる。まずは自分の目標が何かを定めて、このプログラムへの参加を検討することが大切だと思われる。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

BBC ニュースのポッドキャストは、イギリス英語の聞き取りの練習になりました。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 教養学部理科一類・学部2

参加プログラム: シェフィールド大学サマープログラム 派遣先大学: シェフィールド大学

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職

派遣先大学の概要

イギリス中部の都市 Sheffield に位置する歴史のある大学。
英語学習の必要な留学生は、大学より北に離れた ELTC という施設で英語教育を受ける。

参加した動機

・まだ海外に出たことが無かったので、この機会に経験をしておきたい
・学部3年、もしくは修士課程での長期留学を検討しているので、そのための準備の一つとして参加したいというのが主な動機でした。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)
とりあえずは、何の書類をいつまでに出すかを把握してしっかり出せば OK だとおもいます。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)
Student visa の申請に関しては、団体フライトで入国したので、入国審査で先頭の人以外は特に書類を提示しないまま visa を取得できました。ですが、大学から指示された書類はすべて揃えてから入国するのが無難でしょう。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)
常備薬の購入をして、念のため近所の医者健康の相談にいきましたが、特にイギリスで体調を崩すことは無かったです。むしろ、涼しくて快適でした。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)
AIU という会社の留学保険に加入しました。最初は他の会社の保険に加入したかったのですが、ネット加入の場合に本人名義の口座のクレジットカードを必要とされたので、仕方なく AIU にしました。少し加入額が高かったです。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)
参加手続きの際に、前期教養学部確認サインをもらいに行きましたが、その他は特に何もなかったです。ただ、進学振り分け希望登録に関しては、渡航中にパソコン等で登録を行いました。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)
海外経験は0、TOIEC は 600 点レベルで非常に心許なかったです。プログラム参加が決まってから、リスニングの練習を細々と続けました。

⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど
気候が気候なので、少し暖かめの上着があると良いと思いました。また、大学のアクティビティが充実していて、サッカー大会などのイベントもあるので、動きやすい服、靴をもっていくと良いと思います。

学習・研究について

①プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)
午前は English Skill のクラス、午後は人文系分野のレクチャーが中心でした。English Skill は、クラス分けでいたい2つのレベルに分けられていました。Discussion 中心のクラスと、Grammar・Speaking 中心のクラスがあったようです。ただ、日本人の学生が半数以上いて、国際的な雰囲気はあまり感じられないので注意！。午後の部は、予習授業、レクチャー、復習&Discussion という流れで進みました。予習授業でレクチャーに登場する単語の確認を行ってくれたので、専門用語が分からないという事態はありませんでした。

②学習・研究面でのアドバイス
レクチャーの難易度が不安定なので、理解できる回とできない回がありました。もしすべてのレクチャーをきちんと理解したい、もしくは気になる学問分野がテーマのときは、録音させてもらったりすると良いと思います。

③語学面での苦労・アドバイス等
大学側が強制的に英語能力を鍛えさせる訳ではないので、英語を身につけたい方は受動的にならないように気をつけてください。とにかく自分から話し、質問するべきです。僕が言えたことではないのですが。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)
The Endcliffe Village という学校の寮でした。Sheffield の中心街から遠いですが、宿舎は綺麗で、Wi-Fi も提供され、暮らしにくさは特に感じませんでした。コインランドリーを現金で利用できず、カードが必要だったのが少し面倒でした。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)
Sheffield は、治安が良く、気候も良く、非常に過ごしやすい環境でした。ただ、中心街の店は6時に閉まることが多いので、買い物は隣のショッピングモールですることもありました。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

医療機関利用に関しては、渡航中にシェフィールド大学から通知が来たので、もしその場合はその利用案内に従えば良いと思います。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃 23 万円、授業料+家賃+朝夕飯 15 万、昼食+交通+娯楽 6 万、くらいでした。航空費の比率がちょっと高すぎるかな、という状態です。個人で行く場合は、もう少し安く押さえられるはずですよ。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

JASSO の奨学金で、約8万円を支給されました。シェフィールドサマープログラム要項に説明がありました。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

大学の提供するアクティビティ(スポーツ、ダンス等)、週末の旅行、寮の草地で遊ぶ、パブに行くなど、色々な活動ができました。平日は9時から 16 時位までは学校にいますので、自由に活動できるのは基本的に夕方からでした。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

プログラム初日に、各種サポートの説明用紙が配られましたが、超短期留学生にはあまり必要なさそうなものが多かったです。ネット上の英文法資料、病院、図書館、学内 PC の利用サポートについては、便利だと思いました。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館、談話室、カフェ、学内 Wi-Fi、学内 PC が利用可能でした。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

僕にとっては、初の海外渡航として、得た物は非常に多様でした。特にこのプログラムに関して言うと、イギリスの学生・教員の考え方・雰囲気、学習環境と生活環境を知り、それらと日本のそれとの比較を通して、自分の環境を相対化できたのは大きいです。「こんな風に勉強していけたらなあ」と、学問に於けるロールモデルを考えることができた気がします。また、共に学んだ東大生・院生との交流からも、数えきれない程のことを教えてもらいました。自分はこれからどう生きていけばいいのだろうかということを広い視野で見ることができました。

また、イギリスの文化や慣習に触れられたのが良かったです。日本とはまた違ったライフスタイル、洗練された人々の生き方など、古くから産業で動いてきた国の現状は、新鮮な発見に満ちていました。新渡戸稲造の、「ひとつしか知らない者は、ひとつをも知らない」という言葉が身にしみた滞在でした。

②参加後の予定

今後は、英会話能力を中心に学習しつつ、長期留学の機会を窺いたいと思います。また、今回の体験で得たものを使って、将来のキャリア、生き方を考え直してみたいと思います。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

次回は、今回のプログラムの反省(?)によって、さらに意義深い学習ができると思います。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

地球の歩き方

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 教養学部教養学科超域文化科学分科現代思想・学部3

参加プログラム: シェフィールド大学サマープログラム

派遣先大学: シェフィールド大学

卒業・修了後の就職(希望)先: 1. 研究職

派遣先大学の概要

シェフィールド大学。サウスヨークシャー州シェフィールド市に位置する国立大学で、ノーベル賞受賞者を5人輩出している。市内に数多くの研究施設を擁しており、留学生の英語教育センター(ELTC)などの設備も充実している。市内には24時間利用できる図書館もある。

参加した動機

今後の進路として院進学を選択する場合に、総合的な英語のスキルが必ず要求されると思い、英語に触れることへの抵抗をまず取り去って、今後の継続的な勉強の緒とすることができれば、と考えて参加しました。

参加の準備

- ① プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)
教養学部のホームページに出ている「お知らせ」のなかにある留学プログラムに関する掲示を見て、本郷国際交流課へメール。その後は交流課の指示に従って各種書類をその都度記入し、交流課へ提出する。特に志望動機などを書くときには、それを読んでくださった方にしっかりと自分の考えていることが伝わるかどうか、吟味するようにした。
- ② ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)
スチューデントビザで入国。今回の場合、特殊な申請は要らず、イギリスへの入国時に滞在先証明書、東大の在学証明書などを提示することで取得できた。滞在先証明書は国際交流課より、在学証明書は大学窓口より入手した。
- ③ 医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)
特に行っていない。
- ④ 保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)
自宅近くの旅行代理店にて AIU の海外旅行保険に加入。二週間の長さで、出国・帰国の日時と行き先の国がある地域、保険の細かい保障内容によって料金の変動。今回は二週間・イギリス・損害賠償額無制限の内容で1万円程度だった。
- ⑤ 留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)
自分が所属している部署の担当者から一定の説明を受け、そのことを証明する署名を窓口で貰わなければならない。後期教養学部所属の場合、駒場キャンパスアドミニストレーション棟の後期課程窓口にて申請。このほか、単位習得のための手続きは特に行っていない。
- ⑥ 語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)
留学前の TOEIC のスコアは 775 点で、英語力には自信がなく、特にリスニング・スピーキングの能力で大きな不安を抱えていた。そのため、留学の準備としては、BBC ニュースなどを利用して毎日英語の聴解に時間を割き、同時に英会話の基礎例文集などを読み、英会話で咄嗟に使えるフレーズを少しでも増やすことに意識を向けた。
- ⑦ 日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど
食事にしっかりと対応できるか不安な人は、日本からいくらかのレトルト食品や醤油などの調味料を持ち込むといいと思います。また、現地で使用可能な携帯か wi-fi 用の機器をレンタルしておかないと、外出時に連絡を取る手段がないので要注意。
ロストバゲージしたとき、財布を盗まれたとき、現地で迷子になってしまったときなど、事前に想定可能なトラブルが実際に起こったときに必要な対処法を調べておいた方がいいと思います。今回のプログラム期間中にもそうしたトラブルに巻き込まれた人間が何人もいました。

学習・研究について

- ① プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)
基本的なルーティンとしては、午前中にシェフィールド大学の英語教育プログラムで他国からやってきた留学生も交えて英語のレッスン(英語の文法的な事項を復習しながら簡単なディスカッションを重ねる)を3時間受講し、午後はシェフィールド大学の教授が交替で行なう講義を1コマ受講する。講義の後にはシェフィールド大学の学生を交えてディスカッションを更に1コマ分の時間行なう。

② 学習・研究面でのアドバイス

英語能力の養成が目的となっているプログラムなので、各人が自分の英語能力の欠点をしっかりと自覚し、課題の克服のためにはどのようにプログラム中の講義や課題に臨むべきかを考えておいた方がよい。プログラム期間中はどうせ周囲にいるのは知らない人ばかりなのだから、と割りきって積極性を持つことも大切。会話のなかでは、現地の人間が特定の場面で使っているフレーズをどんどん盗んでいくことでよりスムーズにコミュニケーションを取ることができるようになる。

③ 語学面での苦勞・アドバイス等

初めは、普段の勉強の際によく聞いているアメリカ英語との違いのせいか、現地の人々のしゃべる英語がぐちゃぐちゃとした発音に聞こえ、内容をしっかりと聴き取ることが難しかった。それをある程度克服しても、どうしても上手く単語に区切って聴き取ることが出来ない部分が出てくるが、そういった部分はたいていのばあい、会話のシチュエーションごとに決まりきった定型句のようなものが多いので、英会話例文集などで確認すれば何を言っていたかが大体わかってくるし、そうした知識を積み重ねていくとより会話の理解が早くなっていくと思われる。

生活について

① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

シェフィールド大学の寮に宿泊していた。朝・夕飯つきで二週間 970 ポンド(約 15 万円)。部屋は個室で、大きなベッドと広い机がついていて心地よく過ごせるが、換気に適した設備がないので宿泊中は喉の調子が少し優れなかった。バス・トイレは一緒になっており、バスタブがなくシャワーのみ。到着初日、現地まではシェフィールドの大学生がプログラム参加者を引率してくれた。

④ 生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

シェフィールドは大きな郊外型の街で、シェフィールド大学の施設はあちこちにバラけている。今回宿泊した大学の寮は街の端に位置していたので、講義を受ける施設までの移動は 30~40 分の徒歩かバスに 10 分程度乗ることになる。バスは学生割引が(シェフィールド大学の学生証で)使えるので、片道 0.8 ポンド。大半のお店は 17 時には閉まってしまうので、必要なものがあるときは夕方までに買いに行かなければならない。食料品を売っているスーパー・コンビニは夜遅くまでやっていたり 24 時間営業のところもわずかにあるが、日本のようにどこにでもあるわけではないので街を初めに訪れたときにチェックしておくべき。食事はカフェやバーでサンドイッチやハンバーガーを食べることが多かった。お金は全て現金で、財布に入れない分はシェフィールドの寮の自分の部屋のなかに鍵をかけて置いておいたが、大学の寮ではない一般のホテルなどに泊まる場合はもう少し用心する必要があるかもしれない。

⑤ 危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

イギリスの治安は比較的良いと聞いていたが、それでも外出時は持ち物を肌身離さないことを心がけた。持病は特になかったが、現地で医療機関にかかる高額な請求を受けたり、一般に売られている医薬品も身体に合わない場合があると聞いたので、必要になる可能性のある風邪薬・頭痛薬などは持参した。特に歯医者が高額になるらしいので、歯医者での治療が必要になる可能性のある人は事前に行っておいた方がいい。

⑥ 要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

団体フライトの航空賃が約22万円。授業料・家賃・ケイタリング代(寮費)が併せて約15万円。これに毎日の食費・娯楽費などで約6万円と購入した書籍の代金が約2万円程度。

⑤ 奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

特になし。

⑦ 学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

シェフィールド大学の英語プログラムの活動の一貫として、現地のイギリス人学生と留学生と一緒にこなう様々なアクティビティがある。これらは、平日の午後から夕方にかけて開催され、事前にメールを送れば参加できる。スポーツ大会やお茶会、映画鑑賞や観光など、毎週様々なアクティビティが企画されている。現地の学生や他国から来た留学生と交流する貴重な機会なので、大学側からも強く参加を勧められる。平日はそうした活動で充実しており、週末はプログラムのスケジュールに組み込まれたヨーク観光や、それ以外もプログラムの仲間と企画してシェフィールド近くの主要都市への観光に出かけた。

派遣先大学の環境について

① 参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

現地での諸手続きや過ごし方に関してのガイダンスがほとんどなく、到着してからの二日間ほどは戸惑うことが多かった。寮自体のサポートは 24 時間体制でレセプションが機能しているので、部屋に何か問題があったり必要な物が出たときはすぐに対応してもらえる。語学・学習面でのサポートは、講義の前に preparatory seminar があり、講義の後には discussion の時間が設けられたりと、英語能力に不安のある学生が置いていかれないような配慮が多くなされていたと思う。

② 大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館は 24 時間利用できるものもあり、(今回は短期滞在のため本格的に利用する機会はなかったが)勉強するのに非常に良い環境である。スポーツ施設は大学の設備なのかどうか判然としないが、アクティビティで屋内施設やグラウンドを利用することができる。大学の寮についていた食堂は朝・夕飯とバイキング形式で分量は申し分なかったが、朝のメニューが毎日同じなので飽きが来る人もいるかもしれない。PC は大学の施設内に利用可能なものが有るほか、キャンパス内と宿泊施設で大学無線 LAN が利用できるのも携帯端末があればそこからインターネットへアクセスすることができる。

プログラムを振り返って

① プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

英語能力に不安を持ちながらの参加でしたが、参加してみてわかったことは、勉強の量以上に大切なことはゆっくりでもなんでもちゃんと話せば「伝わる」ということを実感して、外国人とコミュニケーションすることへの自信を高めることだ、ということです。たとえ単調な表現しか扱うことが出来なくても、外国人の人びとは「つまりこういうことだよな？」とこちらの主張をよりしっかりとした英語に置き換えてくれます。そうした会話を重ねていくうちに、自分の表現が少しずつ豊かになっていくことが実感できると思います。別にこなれた英語でなくとも、文法がしっかりとしていなくても(聞いているとわかりますが、現地の人びとも常に厳格に文法に従っているわけではなく、ラフに英語を使っていることが多いです)ちゃんと伝わるんだ、ということが確認できたことが自分にとって、このプログラムで最も有意義だったと感じたことです。

また、二週間のあいだ日常的に英語に触れることによって、英語を読むことへの抵抗がかなり軽減されました。そのお陰で、現地で購入した書籍を日本に帰ってきてからも継続的に読み進めることができている。

現地の人びとと実際に英語でコミュニケーションをすることで英語についてわかることも沢山あります。たとえば、彼らが英語の具体的な音よりもアクセントにかなりのウェイトを置いて会話していること。勿論、知識としてアクセントの重要性はみなさん認識しているとは思いますが、これが実際に会話をしていることではっきりと認識され、自分でも勉強するときに、アクセントをより明確に意識するようになるなどの変化がありました。今回のプログラムでは、観光地で現地の人に道を尋ねるときにこのアクセントの重要性を一番認識しました。

また、英語圏の文化と言っているのかわかりませんが、現地の人と話していると、本当に多くの人間が「私は～～だと思えます。なぜなら～～だから。」と言ったしゃべり方をします。自分の意見をまず告げ、そのあとにその主張の根拠・理由を述べるのが(もちろん大切なことなのですが)日常的なしゃべり方のなかに浸透しているように感じました(これは帰国子女の人と話しても感じることです)。そうした一連のしゃべり方の型を話しながら身につけていくことも会話スキルの向上には不可欠だ、ということを感じさせられました。いちいち自分の言いたいことを日本語から翻訳するよりも、こうした型を沢山内面化して、言いたいことをそれらの型に載せて差し出す、といった感じでしょうか、そうした英語への入り込み方を今後の学習のなかでも意識するべきだと思いました。

② 参加後の予定

今後は、プログラム参加によって身につけた英語の習慣を継続しながら、自分の専攻に関わる分野の論文を読み、理解する能力を高めていく予定です。

③ 今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

大事なことは自分の英語でもしっかりと伝わるということを実感することです。それだけで、自分の英語の勉強の意義がはっきりと意識できるようになります。

その他

① 準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

② その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。